



震災から3か月が経過しました。  
被災地のライフラインは整いつつありますが、行方不明者はまだ約8千人。

現地では、行方不明者の捜索や、多くの瓦礫の撤去作業がいまも続いています。

大隅半島4市5町で構成する岩手県大船渡市の復興支援チームは、現在第14次班を派遣し復興支援を行っています。

帰町した職員が語る現地での第一印象は、「想像以上の被害だった」ということ。

また、子どもたちが、ボランティア活動に積極的に参加し、復興に向けて力強く生きる姿に「勇気をもらった」という声も多く聞きました。

復興支援を行った派遣職員の声を紹介いたします。

第7次派遣 川越洋【農林振興課】

【4月27日～5月4日】

被災地区では道路の破損や地盤沈下がひどく、満ち潮の時は道路が冠水するなど、いまだ危険な状況でした。

現地の方と話をすると、「私は家はまだあるから良かった」「他にもっと酷い状況の人がいるから弱音を吐いてはいられない」と多くの声を聞き、東北の人の強さや他人を思いやる優しさに触れ、自分達にながでできるかということを考えさせられました。

第8次派遣 東平正孝【農林振興課】

【5月3日～5月10日】

瓦礫が整理されたり、仮設住宅の建設が始まるなど少しずつではありますが、復旧が進んでいました。

今回の津波での被災者がやり場のないストレスを心の中に押し殺しながらも「前に進もう」と復旧作業を進める姿が印象的でした。

現地の小学校でソフトボールの試合が開催されたり、職場を失った被災者が新たに飲食業をスタートさせる姿を見て、私も元気づけられました。

第9次派遣 中水流幸治【住民環境課】

内田 久雄【耕地課】

【5月9日～5月16日】

気仙地区には『てんでんこ』という津波から身を守る教えがありました。これは「津波の時は人に構わず必死で逃げろ、自分の命は自分で守れ」ということで、最後の『こ』は了解しあうという意味。

人間には情があるが、津波による死者を一人でも少なくするには、心を鬼にし、情を断ち切つてもやらなければならぬという意味だそうです。一見非情の様ですが、過去の津波被害の教訓から生まれた言葉であることを考えると、津波の本当の恐ろしさを伝える言葉だと感じました。

第10次派遣 上床就路【住民環境課】

【5月15日～5月22日】

多くの方々から、「遠いところからありがとうございます。本当に助かります。」と感謝の言葉を頂きました。

被災者は、落ち込んだ様子をみせず、前向きな言葉と明るい笑顔が印象的でした。

私自身も困難に直面した際の、前向きな気持ちと心の強さを学べたとともに、元気をいただきました。

今回の体験で得たことを多くの人に伝えることが使命だと考えています。

第11次派遣 鶴野雄司【企画調整課】

【5月21日～5月28日】

実際に被災地を目の前にして、テレビで見るとかなりの差があると感じたのが現地での第一印象でした。

震災から約2か月が経過し、ライフラインも少しずつではありますが復旧していました。

今回の復興支援活動で給水班として活動する機会があり、タンクローリー(3000ℓ積載)で大船渡市内の赤崎地区や蛸ノ浦台地区を巡回しましたが、日々、ポリタンクなどに給水する人が少なくなり、上水道が復旧していくのを感じました。

